

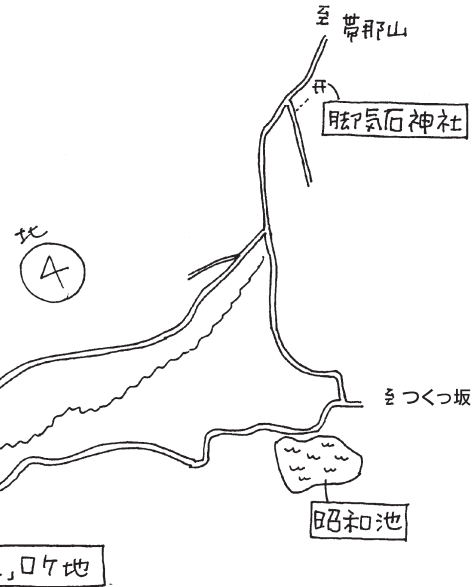
# 甲府市 上帯那 のんびり フットパス ガイドブック

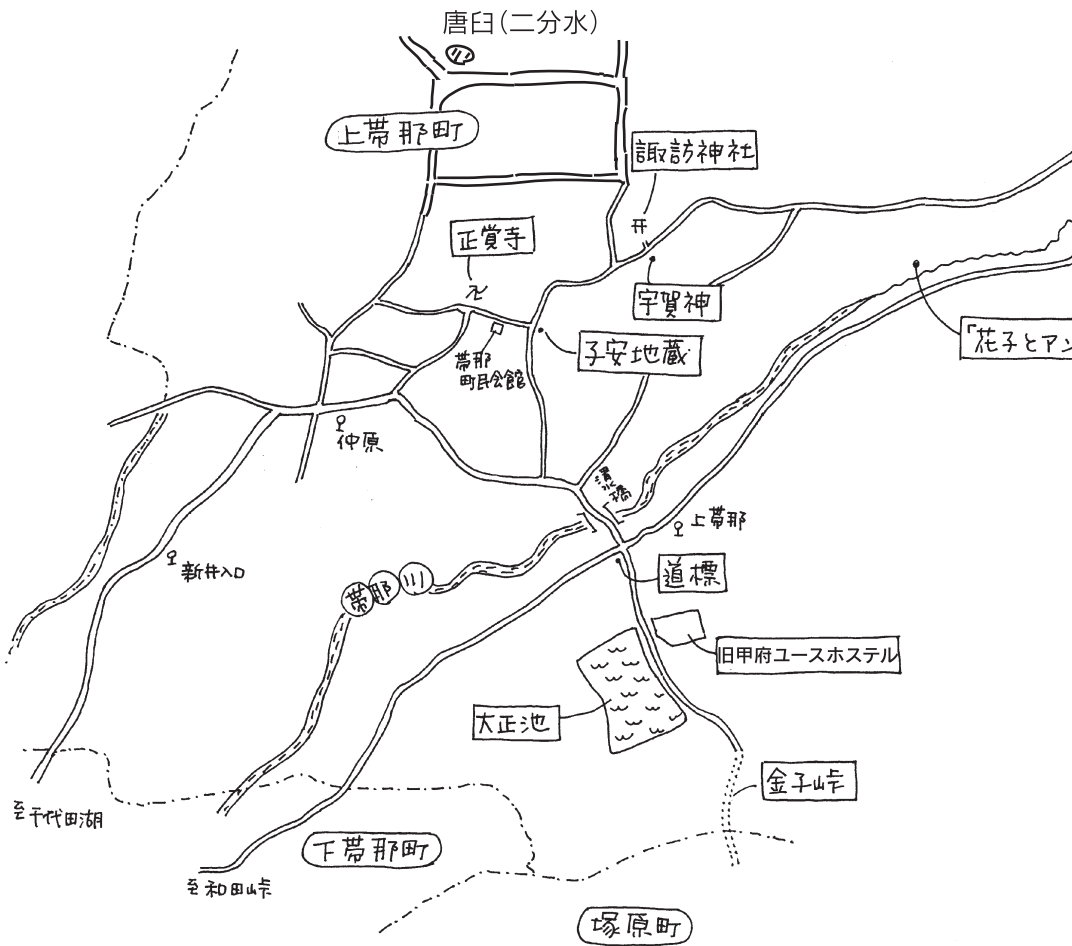
## 01

大正池や「花子とアン」ロケ地、  
スサノオノミコト伝説が残る脚氣石神社、  
乳を飲ませる子安地藏尊などを訪ねる

もくじ

- 01●帯那の地名
- 02●大正池
- 03●金子峠
- 04●旧甲府ユースホステル
- 05●御岳道
- 06●板碑
- 07●道標
- 08●「花子とアン」ロケ地
- 09●昭和池
- 10●要害城の普請
- 11●脚氣石(かつけいし)神社
- 12●ちよっと寄り道  
帯那山山頂
- 13●上帯那諏訪神社
- 14●へびの体をした宇賀神
- 15●棚田
- 16●正覚寺
- 17●ちよっと寄り道  
唐臼
- 18●上帯那の子安地藏
- 19●帯那のまちづくり
- 20●帯那地域活性化推進協議会



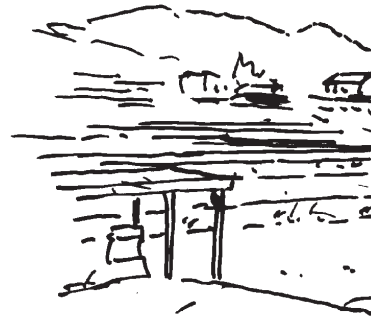


帯那の地名

「耕作地が帯のように広がって見える」といっつことから、『帯那』の地名が生まれた。



01



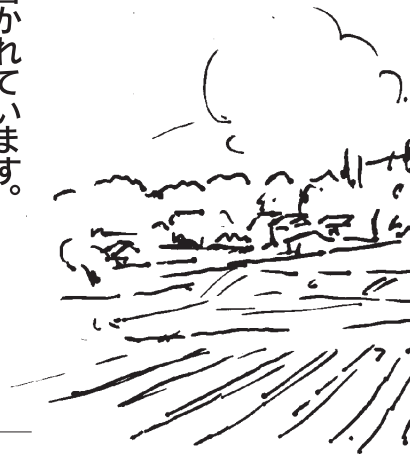
帯那は、甲府市の北部に位置し、標高

五百六十メートルから八百メートルの中山間地域です。甲府中心街とは異なり、夏は涼しい自然豊かな地域です。『甲斐国志』によると地名の由来は、この地域の耕地が帯のように長くつながっているように見えることによるそう

で、ちなみに那は野原を表しているといわれています。信州(長野)と武州(東京・神奈川・埼玉)の境にあり、石高(収穫した米穀の数量)が千石に達するほどあり、山の中にあつてまれにみる豊か

な村と書かれています。

しかし現在では、農家の高齢化や担い手不足により、耕作放棄地が目立つようになってきました。そのため平成十六年に『帯那地域活性化推進協議会』を設立し、耕作放棄地を再利用した畑で「じゃがいもつくり」や「菜の花作り」を行い、耕作放棄地の解消や景観改善に取り組んでいます。またこの活動をおして地域資源の再発見や活性化をはかるよう、地域外の住人や企業との交流活動も続けています。



大正池

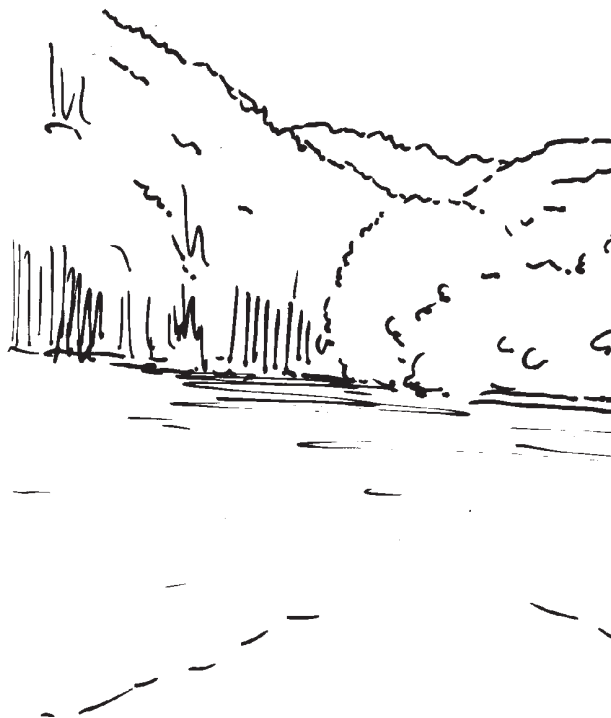
大正池は、水不足に長年苦しんできた  
地元住民の願いによりつくられた。

02



この地域は耕作地に使う水が慢性的に不足していました。大正十二（一九二三）年に千代田村耕地整理組合が設立され、大正十五年に悲願だった灌漑（かんがい）用のため池・大正池が完成しました。

大正池は帯那川の水を取り入れ貯水しています。冬にはスケート、夏には水泳を楽しむ人でにぎわったといえます。昭和初期には山梨県体育協会主催のスケート大会が三回行われていて、地元選手も活躍しました。



金子峠

金子峠は昭和七(一九三二)年に、  
甲府を中心とした景勝地の  
第一位に選ばれた。



03

昭和七(一九三二)年に、山梨日日地新聞の紙上で『甲府を中心とした日帰り納涼地を募る』と題した一般投票が行われました。その第一位に選ばれたのが

「金子峠と大正池」です。それを記念した「金子峠與大正池投票第一位」と書かれ石碑が、旧甲府ユースホステルの前に建てられています。

このコンクール、六月二十一日から七月二十一日までの一ヶ月間に新聞の刷り込み投票用紙を使って投票していくも、  
「櫛形山」や「伊奈ヶ湖」など連日一位が入れ替わる様子が紙面で紹介されています。

最終日前日一位の「高尾山と丸山(中巨摩)」を抑え、七万票余りの得票数を得て一位になったのが「金子峠と大正池」でした。

当日の新聞には「候補地の当落を氣遣うファンの群は、本社前の道路を埋めつくし、一時間毎の中間発表に、時ならぬ歓声を上げて、物々しい光景を呈していた」とあり、その加熱ぶりのすごさが伝わってきます。

和田峠をバスや車が往来できるようになるまで、この道は上帯那住民の生活道路であり、通勤・通学の道路でもありました。





04

旧甲府ユースホステル

旧甲府ユースホステルの前の広場では、  
多くの若者がホークダンスを  
楽しんでいた。



大正池の湖畔には甲府ユースホステルが建てられていました。現在は閉館していますが、日本ユースホステル協会の直営として昭和四十三（一九六八）年に開所しました。土地を地元の方に寄付してもらい、自治体の寄付金を受けての開所だったそうです。昭和四十三年五月二十七日の新聞には、ユースホステルの前の広場で多くの若者がフォークダンスを踊っている写真が、載っています。当時、路線バスは千代田湖までしか来ておらず、利用者はそこから二キロの坂道を歩いてのぼらなくてはなりませんでし

た。

ユースホステルは、まだ、上下水道がなく生活用水は井戸水に頼っていたため、大正池の水位が下がると井戸水がなくなり、軽トラックにタンクを積んで、六キロ先の浄水場まで水を汲みに行かなければなりませんでした。後年見つかった、蛇口についていたと思われる札には「水の一滴は血の一滴」と書かれていて、当時の苦勞が絶えなかつた様子が伺えます。

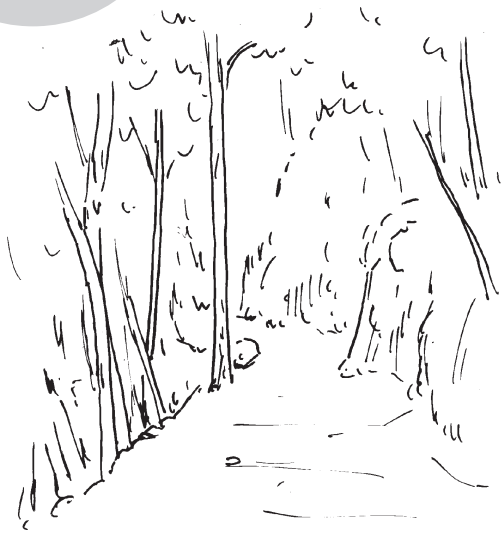
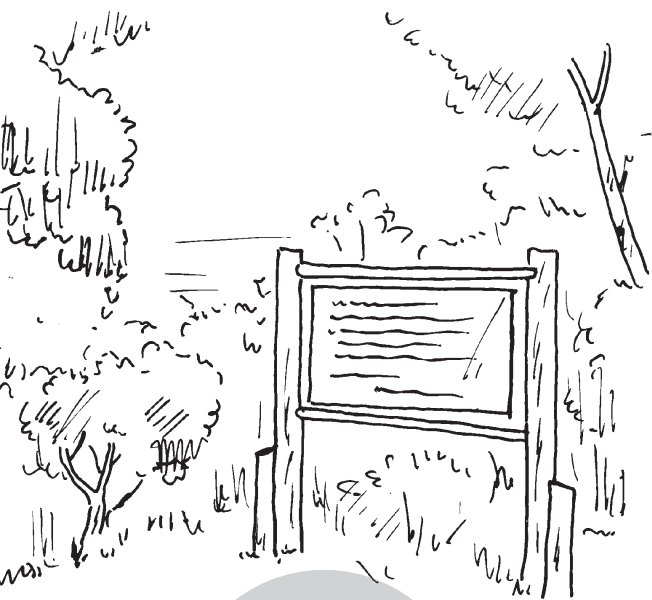


御岳道

金子峠は、

古くは『御岳道』の「ハム」に  
ぎわっていた。

05



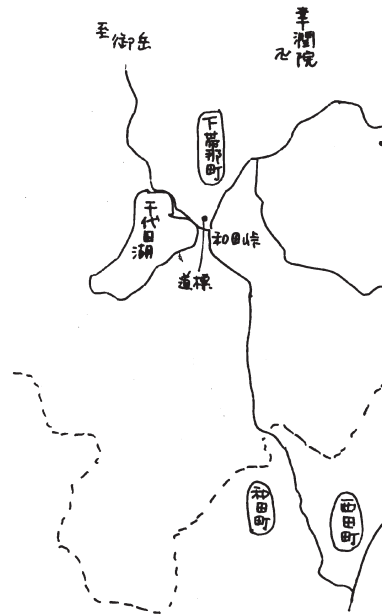
甲州御岳山・金峰山へ参詣(さんけい)するルートは、古くからいくつも開かれていました。その一つに金子峠を通るルートがあります。武田氏館跡(武田神社)の西の道を北へ上がり、塚原町に入り集落を過ぎると「大正十三年道路改修ヲ記念」と刻まれた道標がある三叉路に出ます。道標の左側には「向テ左下帯那ヲ経テ御岳ニ通ズ」と刻まれていて、ここで右が金子峠を通り上帯那に入る道と、左が中峠を越えて下帯那に入る道とにわかれます。

八千代商店前には「右むら 左みたけ」



と刻まれた道標が当時の名残として残っています。金子峠は急な坂道ですが、かつては生活道路としても使われていて、子ども足でも三十分ほどでふもとまで行けたそうです。

また、標高六百七十五メートルの峠からは甲府盆地が見渡せて、最近ではここから見る甲府の夜景が素晴らしいと訪れる人もいます。現在、帯那に行く道としては車の通れる和田峠からの道が主流となっています。



## 板碑

金子峠には峠を見下ろす板碑(いたび)が  
建っている。

金子峠を下る道の入口の左手の小高い丘には、甲府盆地を見下ろすように建っている板碑があります。板碑とは、碑の上部を山形に尖(とが)らせ、その下に二本の切り込みを水平に施し、その下に梵字(ぼんじ)などを配したもので、主に供養塔の一種としてつくられたものだといわれています。

金子峠に建てられた板碑は、年号銘はありませんが室町時代末期につくられたものだと思われます。高さが百三十五センチメートル、幅が三十五センチメートルの細長い板碑には、真ん中に額のようなものとその下に仏像が浮き彫りされています。

地元の古老の話では、この峠道、途中で危

険なところが数カ所あり、そのために無事に通行できるよう人々は安全を祈念して碑の前で手を合わせたといわれています。碑の数メートル下には馬頭観音もありま



06

道標

# 脚気石(かつけいし) 稻荷神社の参道をしめす 道標がある。

大正池から集落に入る清水橋手前の交差点に石碑があります。「是より 右かつけ石大明神へ 十丁 甲府西一条町 ひのきや源兵衛」と刻まれています。甲府西一条町は現在の若松町あたりで、芝居小屋「亀屋座」があつた場所です。また塚原町内に残る「大正十三年道路改修記念」道標の正面には「右上帯那ヲ経テ脚気石神社に通ス 左塚原ヲ経テ甲府市に通ス」とあり、甲府盆地から帯那を目指して多くの人々が行き交つていた往時を偲ばせます。

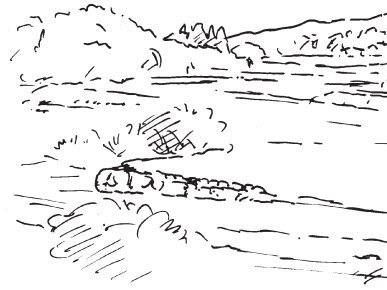


『花子とアン』ロケ地

NHK朝ドラ「花子とアン」の  
ロケ地があつた場所がある。

08





昭和池へと坂道を進む途中の左手に、棚田がきれいな場所があります。その真ん中あたりの田んぼが、NHKの連続テレビ小説「花子とアン」のロケ地として花子の生家が建てられた場所です。眼下に棚田が広がる場所として選ばれました。

「花子とアン」は、『赤毛のアン』を翻訳した甲府市出身の村岡花子の、明治・大正・昭和にわたる波瀾万丈の人生を描いたものです。撮影を始めるにあたり、地元自治会長らも列席して番組安全祈願祭が執り行

われました。そのかいあって、撮影も無事終了。吉高由里子さん演じる花子に日本中が魅了されました。

撮影に使ったオープン生家は、現在は葦崎市民俗資料館の隣に移築されて一般公開されています。同じ敷地内には、はなと幼なじみの朝市が夜中に忍び込んだ教会として使われた葦崎宿豪商の蔵座敷もあり、連日、花子ファンでにぎわっています。

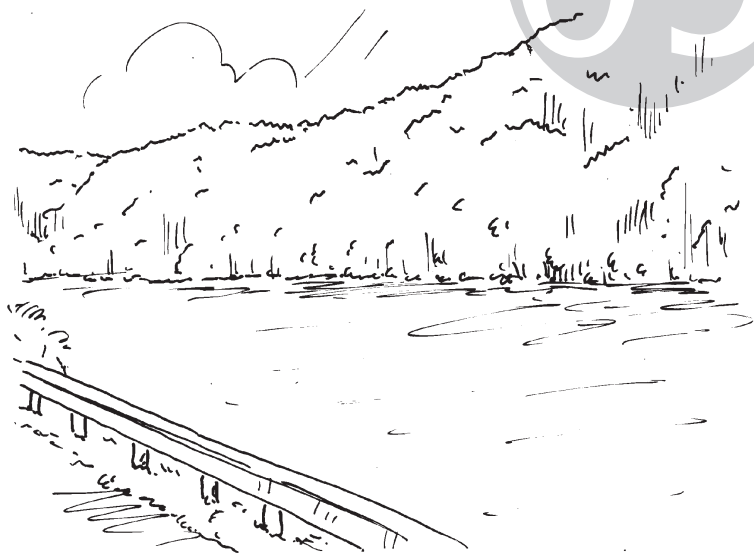


昭和池

昭和池は上・下帯那の耕作地を

潤(うるお)してゐる。

昭和池は、上帯那町穴口地内にかんがい用のため池として、千代田村耕地整備組合により昭和二(一九二七)年につくられました。昭和池は、大正池と同様に帯那川の水を集めて貯水しています。貯水面積は約〇・八八ヘクタール。貯水量は三万五千九百八十四立方メートルで大正池とともに、上・下帯那の耕地を潤しています。いくどかの補修工事を経て、現在も満々と水を貯えています。



09

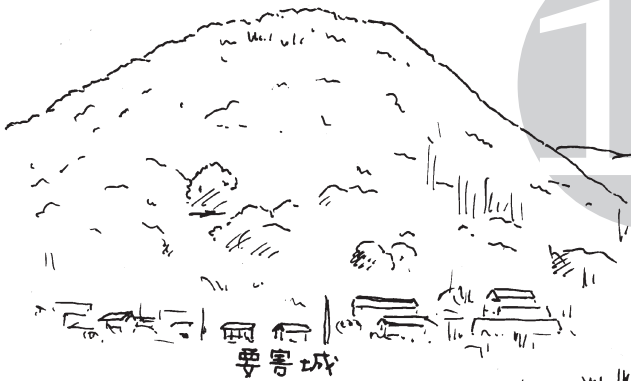
要害城の普請

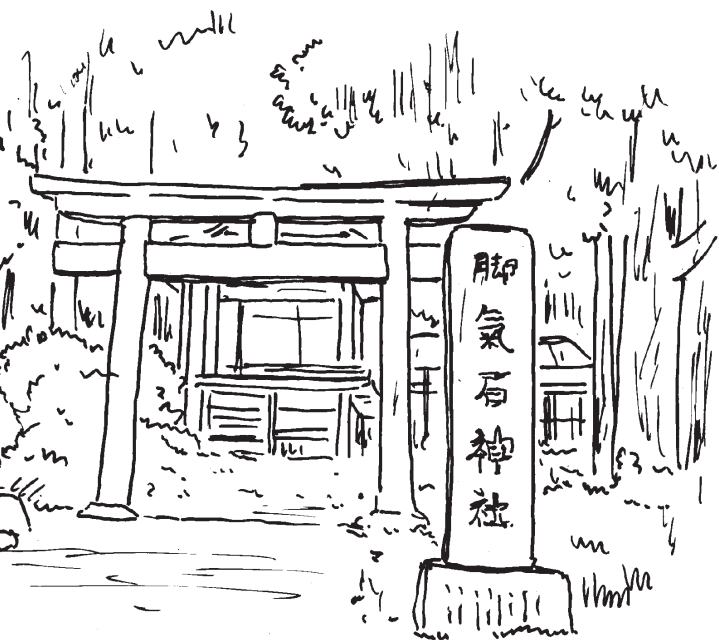
武田勝頼の時代の帯那衆は、  
要害城の普請(ふしん)をしていた。

天正四(一五七六)年に武田勝頼が、帯那郷に要害城の普請(建築工事のこと)を命じた書状が残っています。帯那郷の人々に毎月三日ずつ積翠寺要害城の普請を申しつけていて、その代償として河除け(堤防普請)と他の普請役を免除しています。

長篠の戦での敗北で、つつじが崎館の詰城(つめしろ)としての要害城が改めて見直され、その拡張工事を始めるためだと考えられています。

積翠寺へは「つくつ坂」を越えていく道もあります。





脚氣石(かっけいし)神社

ヤマトタケルの足の痛みをとった  
といわれる脚氣石神社。





昭和池を北に進むと帯那川の上流にでます。帯那川に沿うように脚氣石神社が建っています。鳥居をくぐると左手に神楽殿もあり、格式の高さを感じます。その奥にあるご神体は、高さ一メートル五十センチくらいの大石で、上に小さな石の祠が祀っています。大石の真ん中は大きく割れていて直径二十センチメートルくらいの石がたたくさん詰められています。

この石にはヤマトタケルの伝説がありません。ヤマトタケルが東征に向かう途中、この



地を通りがかったところで足が痛みだしました。傍（かたわ）らにあった大岩に腰掛けて休み、大神を祀って祈願したところただちに足の痛みが治まりました。以来、足腰の痛みに効き目がある石とされています。

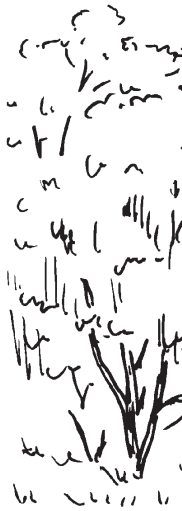
その後、武田信虎が米山丹後守に命じて、石の上に祠を建てさせたともいわれ、長く信仰されてきました。現在でも四月の第二日曜には地元住民による例大祭が行われています。



帯那山山頂

帯那山山頂から、美しい  
富士山を見ることが出来る。

脚気石神社の脇を上がると、帯那山登山道になります。途中コンクリートで舗装されているところもあれば石がゴツゴツしているところもありますが、二時間三十分ほどで山頂につきます。山梨百名山にも数えられる帯那山山頂は、東面になだらかな斜面が広がり六月中旬頃にはアヤマゲが咲き誇ることで有名です。天気がよければ、奥秩父の山々や南アルプス連峰、富士山や大菩薩連峰まで眺めることができます。特に「関東の富士見百景」にも選ばれた美しい富士山の姿は一見の価値があります。



諏訪神社

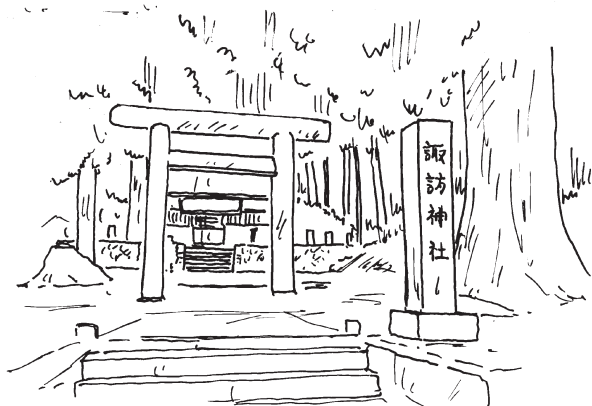
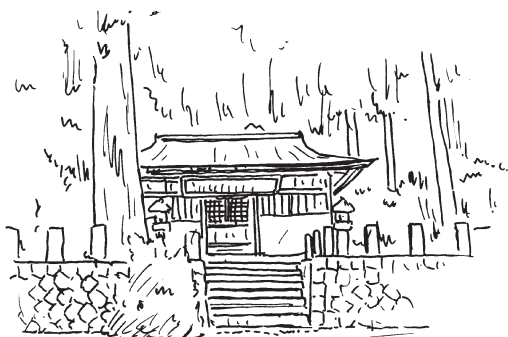
# 諏訪神社は五穀豊穡

(ごこくほうじじょう)

を祈る神様だ。

上帯那諏訪神社は信濃の諏訪大社のご祭神・建御名方神(たけみなかたのかみ)を勧請して里宮としたのがはじまりだといわれています。諏訪神社が初めて建立されたのは延宝六(一六七八)年八月とのこと。その姿、内容は定かではありませんが、荒廃がひどく、昭和八(一九三三)年にかけて、現在の神社に建て替えられました。諏訪神社は武勇の神としても知られていますが、古くは風・水の守護神で五穀豊穡を祈る神として信仰されています。現在のように肥料や農機具などが発達していない時代、自然に対し真摯に祈る人々の心が伝わってきます。

13



宇賀神

頭が女性、体がへびの神様が  
祀<sup>(まじ)</sup>られている。

諏訪神社の向かいの畑の入り口に、小さな像が祀られています。宇賀神(うがじん)と呼ばれるもので、体はとぐるを巻いたへびで、頭には人間の女性の顔をつけています。もとは八臂(はつぴ・八本の手)の弁財天の頭上に載っているもので、弁財天と同じく水の神様として信仰されています。

年号銘などはなく詳しい由来はわかりませんが、見下ろす田畑に水を絶やさぬようにとの願いが込められているのでしよう。

14





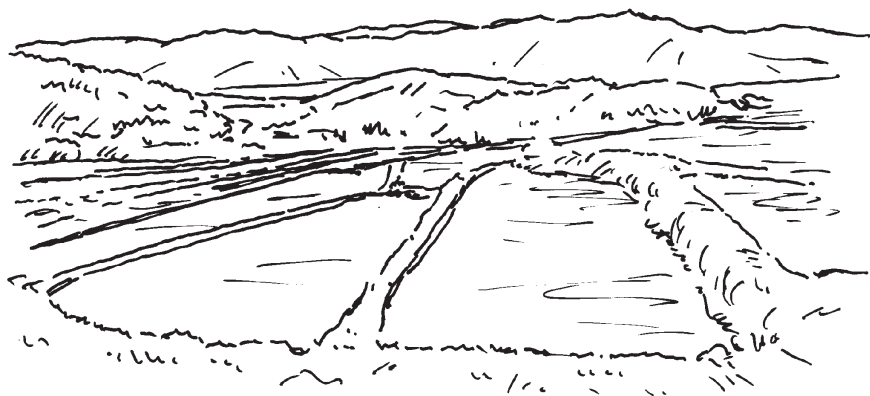
棚田

帯那には、  
美しい棚田が広がっている。

帯那地域の魅力の一つに棚田があります。山の斜面や谷間の傾斜地に階段状につくられた水田は、四季折々美しい姿を見せてくれます。昼夜の温度差が大きいため、上質の米がとれるといわれています。

生産条件の悪い土地で収穫量を少しでも増やそうと、先人たちが山や谷をきり開き石垣を積み上げて作ったものです。先人たちの知恵と苦勞の結晶だともいえます。

15



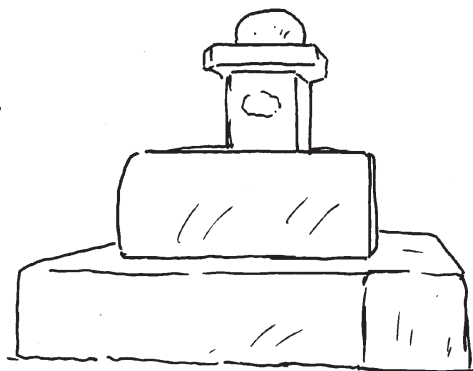
## 正覚寺

イチヨウの大木が  
出迎えてくれる正覚寺。

瑠璃光山正覚寺は臨済宗のお寺です。お寺の入り口では、石幢(せきどう)や六地藏(ろくじぞう)などが出迎えてくれます。また、三方に丸石をのせた珍しい形の道祖神も祀られています。

その中に「三界萬霊塔」というひときわ目立つ石碑があります。『三界』とは欲界(欲の世界)・色界(物質の世界)・無色界(精神だけの世界)の三つの世界をさし、生まれかわり死にかわる世界のことをいいます。『万霊』は生きとし生けるものという意味で、「三界萬霊塔」は、人間や鳥、獣あらゆるすべての霊を供養する塔です。

16



唐臼(からうす)

# 唐臼の臼は、「我田引水」の語源？

17





上帯那の奥地に字名で唐臼という地名があります。さらにその奥には幕岩という地名と山があり、そこから湧き出する清水が幕岩川となつて唐臼に流入し米づくりに貴重な水源となりました。

その大切な水を平等に使おうと、東西の地域で耕作している人たちは流れ出る水をいったん石臼に受け入れ、あふれ出る水を東に七、西に三の割合に分散して使用し、これを住民は「カロースのウス」と呼称して

きました。

耕作面積に合わせ平等に分けたはずの臼ですが、東西どちらからともなく、我が家の田の水が足りないなどの理由で夜中に臼のところまで行って、相手側の出口をふさいですべての水を我が方にとり行為がひんばんに起こりました。まさに「我田引水」この言葉の発祥地はカロースのウスかも……。

子安地蔵

上帯那の子安地蔵は  
赤ん坊にお乳をあげている。



18



上帯那街道沿いに、庚申塔や馬頭観音などが並べられている場所があります。中央には、赤ん坊を抱いている優しいお顔の子安地藏が安置されています。

蓮の花を模した台座の下にある八角の塔身には「子安地藏大菩薩 文化六年巳巳天七月吉日」と刻まれています。左手に赤ん坊をかかえている地藏尊の胸元には、乳房のかたちがくつきり彫られて、右手を右の乳房の下に添え、赤ん坊にお乳をあげています。

この地藏尊は文化六（一八〇九）年の春、

信州高遠の石工・原和吉を招いて彫ってもらったものです。そのころ女性たちは子供に恵まれず、また生まれても丈夫に育たず、子供を持ってない悩みをかかえていました。そのため、地元の有志により祈願、奉納されたものです。

かつては妊婦の数だけ底の抜けた柄杓（ひしゃく）を奉納していましたが、戦後、廃止されたため、今では茶菓子やだんご、季節の果物などが供えられています。



菜種油作り



19

帯那を愛する地元の人々によって、  
帯那の新しい町づくりが始まっている。

帯那のまちづくり

農家の高齢化にともない帯那でも、耕作放棄地が目立ってきていました。そこで定年退職を機に地元に戻っていた人たちを中心に、耕作放棄地を再利用しながら地域のピーアールをかねた地域活性化ができないかという検討が始まりました。

「いったん帯那を出て行った人も、いつか生まれ育った土地に帰りたいと思えるような環境をつくりたい」という思いから、平成十六（二〇〇四）年に帯那地域活性化推進協議会が発足しました。協議会は上・下帯那町の住民約六百名で構成され、住民個々が得意の分野を活かした役割分担で活動していきます。

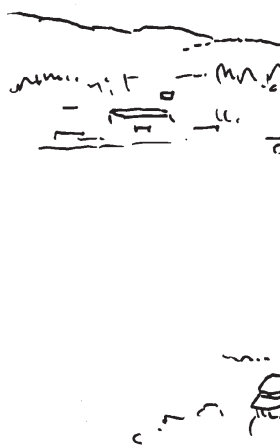
協議会のワークショップでは、地域資源の掘り起こしや問題点の把握について話し合い、菜の花鑑賞会や地域以外からも参加できるイベントなども開催しています。

#### 「菜の花プロジェクト」

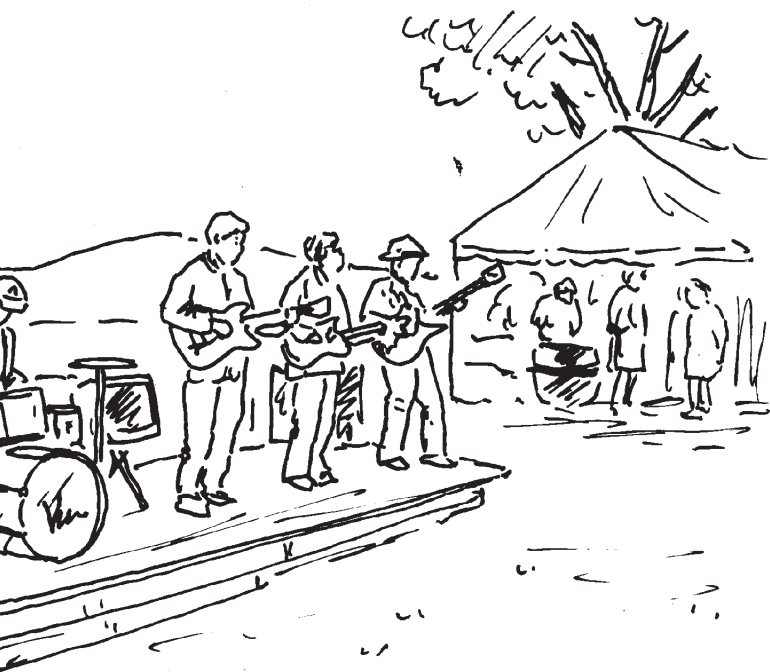
平成二十三（二〇一一）年五月から（株）ファミリーマートと提携し社員などの農業体験活動の受け入れをしています。

#### 「企業の農園づくりに関する協定」

今後は付加価値の高い米づくりや市民農園の開設、また都市と農村の交流などを積極的におこなない、地域の活性化を図っていくように活動を広げて行きます







20

帯那町の畑では、農業体験を楽しむ人の  
にぎやかな声が響いている。

帯那地域活性化推進協議会

帯那地域活性化推進協議会は、さまざまなプロジェクトを展開しています。

耕作放棄地を活用した取り組みとして、畑いっばいに咲いた菜の花を楽しむ「菜の花祭り」や「じゃがいも収穫祭」、「大豆づくり」、「米づくり」などを行い、町内外の方も参加した交流活動をつづけています。当日は、地元のミュージシャンのバンド演奏やおにぎりと豚汁のサービスもあり、会場にはにぎやかな笑い声があふれます。育った菜の花の種からは、菜種油をしばり販売も行っています。



耕作放棄地の再生にとどまらず、いずれはファミリーマーケットの店舗で、収穫物の販売も行なっていく予定です。

また、自然体験・学習プロジェクトとして、地域環境資源センターの方を講師に生き物調査や水質調査を行い、帯那地域の自然環境の変化などについて、子供たちといっしょに学んでいます。